

## テモテ第一5章1-16節 「家族としての教会」

### 1A 敬意をもった指導 1-2

### 2A 助けるべき寡 3-16

#### 1B 本当の寡 3-8

#### 2B 若い寡 9-15

#### 3B 未信者の寡 16

## 本文

テモテへの手紙第一5章を開いてください。今日は5章前半部分、1節から16節までを学んでみたいと思います。ここでの中心話題をまとめるなら、「家族としての教会」です。教会が神の家族であると呼ばれるわけですが、その中にも実際の家族としての関わりがあります。教会が持っている、霊的な奉仕との兼ね合いもありながら、どのように教会が機能していくべきなのかを見していきます。

### 1A 敬意をもった指導 1-2

1年寄りをしかってはいけません。むしろ、父親に対するように勧めなさい。若い人たちには兄弟に対するように、2年とった婦人たちには母親に対するように、若い女たちには真に混じりけのない心で姉妹に対するように勧めなさい。

比較的若い年齢の牧者であるテモテに対して、年の差によって陥りがちな過ちを犯すことのないようにパウロが注意しています。肉の家族と同じように、年上の人にも、また年下の人にも接しなさいと教えています。これまでも、テモテへの手紙第一において、敬虔にかなう健全な教えを見ましたが、その中に「尊敬」というキーワードがあります。上に立つ権威に対して、「すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。(2:1)」とありました。権威のある者に対しては、それにふさわしく彼らのことを敬い、執り成し祈りなさいと言っています。

それが、教会にいる人々に間でも同じなのだということです。その年齢や立場にふさわしい敬意を払いなさい、ということです。年よりには父や母と同じように敬意を払い、年下の若い男女に対しては兄弟や姉妹のように勧めなさいと言っています。今日は学びませんが、17節以降には、長老たちに対しての尊敬が書かれています。これから学べば分かりますが、尊敬するということが、その人の行なっている悪いことや罪を見てみぬふりをするということではありません。戒めるし、指導者に対しては特に、公にその罪を明らかにするということも書かれています。しかし、すべてのことに敬意が必要です。

初めに、「年寄りをしかってはいけません。むしろ、父親に対するように勧めなさい。」と語っています。「叱る」という言葉で訳されていますが、「詰る」ような叱りつけのことです。そして、「勧める」というギリシヤ語は、「励ます」であるとか、あと「助け主」と聖霊のことを言う時に訳されたパレクレーオーの動詞形が使われています。ですから、何か間違いを行なっている時にその誤りを正すのですが、一定の敬意をもって行ないなさいということです。これは旧約聖書からも教えられている原則です。「レビ 19:32 あなたは白髪のある老人の前では起立し、老人を敬い、またあなたの神を恐れなければならない。わたしは主である。」「箴言 16:31 しらがは光栄の冠、それは正義の道に見いだされる。」

そして、若い男性については、どうしても自分より年齢が低いということで、上から視線になってしまったり、見下してしまいがちです。しかし、キリストにあって一つであり、兄弟として敬いながら勧めを行ないなさいと語っています。それから、年よりの女性には母に対するように、そして若い女性に対しては、下心が起こらないように、むしろ自分の肉の姉妹に対しては純粋な思いでいられているように見ていきなさいと勧められています。

## **2A 助けるべき寡 3-16**

そして3節から16節まで、寡について詳しい指導をテモテに与えています。

### **1B 本当の寡 3-8**

3 やもめの中でもほんとうのやもめを敬いなさい。

寡を敬うという言葉、私たちには馴染みが薄いと思います。なぜなら、現代の社会では、社会福祉制度が発達しており、夫がいなくなっても残された婦人は生活のできる制度があるからです。けれども、旧約の時代にも新約の時代にも、それが無かったという背景の違いがあります。神は、寡に対して多くを語られました。「申命 10:17-18 あなたがたの神、主は、神の神、主の主、偉大で、力あり、恐ろしい神。かたよって愛することなく、わいろを取らず、みなしごや、やもめのためにさばきを行ない、在留異国人を愛してこれに食物と着物を与えられる。」「イザヤ 1:17 善をなすことを習い、公正を求め、しいたげる者を正し、みなしごのために正しいさばきをなし、やもめのために弁護せよ。」

そして、教会もこの神の定めた倫理を受け継いでおり、困っている人々を助け、寡を敬うようにしていました。主ご自身もその模範であります。十字架に付けられている時に、ご自身が間もなく死に、そして甦った後すぐに昇天されることを知っておられたので、使徒ヨハネにマリヤをお願いすると頼みました(ヨハネ 19:26-27)。そして母マリヤは、使徒の働き 1章で屋上の間で祈っている弟子たち 120名程の中に、母マリヤも熱心に祈っている中の一人として挙がっています(14節)。ですから、寡は敬いを受け、教会において神に仕える人として数えられていたのです。

けれどもパウロがテモテに、「ほんとうのやもめを敬いなさい。」と命じています。寡は助けるというのは前提での話です。けれども、本当に寡なのかどうかを確かめなさいと命じています。その理由は二つあります。一つは、教会における経済的な事情です。既に教会が誕生してからすぐに、寡に対する配給に関連して、問題が生じていました。「使徒 6:1 そのころ、弟子たちがふえるにつれて、ギリシヤ語を使うユダヤ人たちが、ヘブル語を使うユダヤ人たちに対して苦情を申し立てた。彼らのうちのやもめたちが、毎日の配給でなおざりにされていたからである。」配給において、不公平感を募らせていた者たちが出てきました。そしてもう一つは、霊的な事情です。この配給の問題が生じた時に、使徒たちが祈りと御言葉という教会において最も大切な奉仕が疎かになっていったということがあります。これから見ていく、テモテに対するパウロの指導には、この二つの背景があります。それは、本当に寡ではない者までが支給を受けて、それで経済的負担が増えていること。それから、その支給を受けた人々が、かえって霊的な事柄ではなく、やってはいけないことをするようになる、墮落させるという問題があるからです。

4 しかし、もし、やもめに子どもか孫がいるなら、まずこれらの者に、自分の家の者に敬愛を示し、親の恩に報いる習慣をつけさせなさい。それが神に喜ばれることです。

寡と言っても、扶養できる子供や、また子供がいなければ孫がいるならば、本当の意味での寡ではないということです。確かに夫はいませんが、全く身寄りがないということではありません。けれども、これは単に経済的な理由だけのことではありません。いや、それ以上に「神に喜ばれること」と言っています。確かに、「あなたの父とあなたの母を敬いなさい。」との命令を私たちは受けています。ある日曜学校で、宣教師が日本人の子供たちに教えていた時のことを思い出します。父と母を敬いなさい、というのは、日本の文化や習慣が教えていることではなく、神様が聖書を通して教えていることだから守らないといけない、ということです。常識の範囲ではなく、神の御心だから行なうのです。

5 ほんとうのやもめで、身寄りのない人は、望みを神に置いて、昼も夜も、絶えず神に願いと祈りをささげていますが、6 自墮落な生活をしているやもめは、生きてはいても、もう死んだ者なのです。7 彼女たちがそしりを受けることのないように、これらのことを命じなさい。

本当の寡という定義をパウロはテモテに与えています。寡と言っても、彼女は非常に大きな霊的奉仕を教会においてしており、無くてはならない存在なのです。たとえ、体力が衰えて、自分の体を動かして教会で何かの奉仕ができなくとも、その思いと心、口を動かして主に対して祈ることはできます。いや、祈ることこそ使徒たちが優先した奉仕の一つでもあり、非常に霊的な奉仕なのです。新約聖書の中には、アンナという女預言者が登場します。「ルカ 2:36-37 また、アセル族のパヌエルの娘で女預言者のアンナという人がいた。この人は非常に年をとっていた。処女の時代のあと七年間、夫とともに住み、その後やもめになり、八十四歳になっていた。そして宮を離れず、夜も昼も、断食と祈りをもって神に仕えていた。」教会の中に、このような証しは数多くあります。もう

年老いたお祖母さんが、ずっと祈りに時間を捧げていて、人々の大きな励ましになっているという証しです。

そして、そうではない寡の中に自堕落な生活をしている人々がいる、ということでもあります。このような霊的な資質がないのに、支給は受けているので、やってはいけない数々のことを行なっているということでもあります。具体的にどのようなことを行なっていたのか、よく分かりません。現代においてよくあることは、いろいろな要求をしてきて、それを行なっても不満は口から消えず、そして一度そのことをやめると非常に怒って、「私は教会をやめる」というような例です。そして、そうした一部の自堕落な寡のせいで、寡の方々全員がそられるようになってしまいます。「もう、寡を助けることはやめよう。」という流れになってしまうことを、パウロは危惧しています。それは、主の御心を損ないます。それでパウロは、「彼女たちがそしりを受けることのないように、これらのことを命じなさい。」と言っています。

8 もしも親族、ことに自分の家族を顧みない人がいるなら、その人は信仰を捨てているのであって、不信者よりも悪いのです。

親族や家族を顧みることの重要性を、パウロは強調しています。不信者の中でさえ、扶養の義務を守っているのに、それを怠ったら不信者より悪いのだと言っています。ある注解書に、ある宣教師の話が書いてありました。ある宣教地にいたけれども、本国で自分の親が介護が必要になり、それで看取る時まで本国に戻っていたということです。それで、一部から主の働きをないがしろにしている、という批判があったそうです。けれども、その人は行ない続けて、天に召されてからまた宣教地に戻り、多くの実を結んだということです。

## 2B 若い寡 9-15

9 やもめとして名簿に載せるのは、六十歳未満の人でなく、ひとりの夫の妻であった人で、10 良い行ないによって認められている人、すなわち、子どもを育て、旅人をもてなし、聖徒の足を洗い、困っている人を助け、すべての良いわざに務め励んだ人としなさい。

初代教会の中には、寡として教会が支えるという名簿があったようです。そこには、「六十歳未満の人でなく」という規定があります。本当に年寄りで身寄りがないことが一つの条件です。それから、「良い行ないで認められている」というのがもう一つの条件。そうです、あくまでも教会において奉仕者として認められている人々こそが、教会が敬う寡として名簿に載せます。そして、教会としての恩を返すと言ってもよいでしょうか。彼女が、自分の子どもたちはもちろんのこと、旅人をもてなしました。旅人をもてなすことも、旧約時代にそして教会において新約時代にも命じられていますが、当時は宿を得ることは、悪い者たちから守られるため死活的なことでした。それを彼女は行なっていました。それから、足を洗うことは、しもべの仕事です。聖徒の足ですから、教会の人たちに対して仕えてくれていた人です。そして、困っている人たちを助けるなどしていたので、それで彼女

への恩があるということです。

私たち教会は忘れてしまわないように、しなければいけない原則ですね。外で仕事をしていない奉仕者が教会に大きく貢献して、それで普通は受け取れる給付がその人にはありません。退職金というのはないわけです。そのような人々に対して、教会として敬意を示すということです。

11 若いよめは断わりなさい。というのは、彼女たちは、キリストにそむいて情欲に引かれると、結婚したが、12 初めの誓いを捨てたという非難を受けることになるからです。

教会で定めた規定の中に、「若いよめは断わりなさい。」というものがありません。12 節に、「初めの誓いを捨てた」と言っていますが、これは夫の死後も結婚してはいけない、再婚はいけないということではありません。14 節にパウロは、結婚しなさいとむしろ勧めています。ここは、「教会において寡として生きています」という誓いのことです。主に専ら仕えるため、つまり祈りに専念するなど、フルタイムの奉仕者として生きることを誓った、その誓いのことを話しています。

結局、若い時は結婚をしたいという願望が強くなります。自分が主に仕えると言っても、そうした頸木を外して、結婚相手を探したがるといってしまいます。そうすれば、「なんだ、教会全体で彼女を支えていたのに、結局、結婚したじゃないか。」という誹りを受けてしまうからです。

13 そのうえ、怠けて、家々を遊び歩くことを覚え、ただ怠けるだけでなく、うわさ話やおせっかいはして、話してはいけないことまで話します。

支給をすることによって、大きな霊的問題が出てきます。「怠ける」ということです。怠けることは、箴言の中で何度も何度も、問題であることを話し、何事においても勤勉であるように命じられています。良い行ないを教会として行なっているはずが、かえってそれが人を駄目にしてしまう場合があるのです。同じことが、テサロニケ人の教会で起こりました。「2テサロニケ 3:11-12 ところが、あなたがたの中には、何も仕事をせず、おせっかいばかりして、締めりのない歩み方をしている人たちがいると聞いています。こういう人々には、主イエス・キリストによって、命じ、また勧めます。静かに仕事をし、自分で得たパンを食べなさい。」

そしてなぜ怠けることがいけないのかと言いますと、その余った時間によって、御霊ではなく、肉の欲求のままに従う機会と誘惑が一気に増えるからです。「噂話」がありますね。男の弱さは怒りですが、女の弱さは噂話です。教会では、怒りが私たちに汚しますが、噂話も汚します。

14 ですから、私が願うのは、若いよめは結婚し、子どもを産み、家庭を治め、反対者にそしる機会を与えないことです。

これは女性を蔑視した発言ではありません。しっかりと地に足をつけた生活をすることによって、実質的な証しを立てることができるということです。再婚して、子どもを産むという力が残っているのであれば、教会で支給するのではなく、再婚してそ中で主に仕えなさいと勧めているのです。与えられた恵みと賜物に相応な働きをなさいということです。

15 というのは、すでに、道を踏みはずし、サタンのあとについて行った者があるからです。

神から召されているところから離れると、思わぬところでサタンの罠に陥ります。あまり気づいていないかもしれない。けれども激しい霊の戦いがあります。心に、霊的な怠惰があると、ある時に一気にサタンの罠に引っかかります。この激しさは、教会で奉仕をすればするほど実感します。

### 3B 未信者の寡 16

16 もし信者である婦人の身内にやもめがいたら、その人がそのやもめを助け、教会には負担をかけないようにしなさい。そうすれば、教会はほんとうのやもめを助けることができます。

寡本人は未信者で、教会に行っていない場合のことです。信者でない人については、たとえ信者の身内であっても、教会に負担をかけないようにしなさいということです。

このようにして、パウロは、寡を本当の意味で敬い、助けることができるための具体的な指導を与えました。私たちも、霊的な優先事項を良く考え、教会がどのように仕えていけばよいのかを考えていきたいと願います。「ガラテヤ 6:10 ですから、私たちは、機会のあるたびに、すべての人に対して、特に信仰の家族の人たちに善を行ないましょう。」